

## 中国文化知識の基礎研究其一：伝統童蒙教育課本 『幼學瓊林』初探 上：『幼學瓊林』の諸問題

甲斐, 勝二  
福岡大学人文学部：講師

東, 英寿  
九州大学文学部：助手

<https://hdl.handle.net/2324/1546576>

---

出版情報：福岡大学総合研究所報. 123, pp.251-261, 1990-03. 福岡大学総合研究所  
バージョン：  
権利関係：

中国文化知識の基礎研究其一

## 伝統蒙蒙教育課本『幼學瓊林』初探 上（『幼學瓊林』の諸問題）

甲斐 勝二 東 英寿

はじめに

一九八六年三月長沙の岳麓書社より、伝統蒙学叢書中の一冊として『幼學瓊林』が出版された。印刷数は二十五万部であった。伝統蒙学叢書にはこの他に、筆者の手に集め得たものとして『四書集注』・『三字經』・『龍文鞭影』・『急就篇』の四冊がある。『四書集注』の刊行が一九八五年三月・印刷数四万七千部（八六年再版五万六千五百、計十万三千五百部）、『三字經』が一九八六年八月・二万二千七百部の発刊、『龍文鞭影』が同年九月・九万五千部、『急就篇』が一九八九年一月・一万二千七百部の発刊となっている。この伝統蒙学叢書は、途中より陳景磐を主任委員とする中国古代教育文献叢書編輯委員会（一九八四年三月発足）主宰の「中国古代教育文献叢書」の系列の下に置かれており、『急就篇』の前言にその旨が記されている。

中国では近年歴代の教育の制度及び思想に対する研究が盛んで、制度史思想史等の様々な研究書が出版されているので、このような書籍の出

版は決して怪しむに足りないことだが、研究書である『中国教育思想史』（教育科学出版社一九八七年六月刊）が、二万一千部で、比較的出版数が多いものの、『中国歴代教育制度』（江蘇人民出版社一九八一年九月刊）が、六千六百部、また『中国教育史比較研究古代部分』（山東教育出版社一九八五年五月刊）が二千八百二十部であることを考えれば、伝統蒙学叢書が、決して研究者のみに向けて出版されたものではないことが知れるであろう。つまり、彼の書、特に『幼學瓊林』や『三字經』が『新華字典』なみの出版数に及んでいることからすれば、それらは一般の人へも向けられた出版と考えざるを得ないのである。筆者の手にある現代中国の学校教科書『全日制十年制学校小学语文課本語文試用本』（一九七九年六月北京出版社重印）では伝統蒙学叢書の各テキストが入り込む余地はないように見える。現在の学校教育体系には殆ど縁がないにも拘らず、これほど大量に印刷出版されるということは、それらの書籍に盛られた内容が、いまだに中国の社会や人々に必要とされまた愛されていることを物語るものと考えてよい。

とりわけ、この初探で取り上げる『幼學瓊林』は、岳麓書社出版の他

に、北京市中国書店からも一九八六年六月に民国時代の影印本が出版されているし、一九八八年六月には上海復旦大学出版社より上下二冊本で三万部出版されている。現代中国社会にかなりの需要があったと見なさざるを得ない。では何故現在に至るまでこの書の人気がかく衰えないのかというと、この書によって中国の伝統文化の精華を簡略に手っとり早く学べるからであった。復旦大学出版社には古典文学者の朱東潤氏の序文が載せられ、その中で朱氏は以下のごとく述べている。

『幼學故事瓊林』のような啓蒙知識学習のための読物を整理出版することは、今日の読者（特に青年）にとって、大変有益なことであり、私は深く賛同と支持を表明したい。

わが国の古代文化は、源は遠く流れは長く、燦然と光輝くものである。しかし、今日の読者は、仕事に追われ、学業も忙しく、多くの歴史典籍を読む暇がない。このことは、我が中華の歴史文化に対する認識と理解に悪い影響を与えよう。『幼學故事瓊林』は、蒙学のものといえ、内容は豊富である。わずか十万余りの言葉で、わが国の歴史文化の各分野を網羅し、上は天文地理、下は風土人情に至るまで、必要なものごとく収め、万象を包括している。この書籍を側に置き、自由に開いて読めば、祖国の燦然と光輝く歴史文化に対して、基本的な理解が得られ、それによって知識を増やし、情操を練り上げ、自己の素養を深めることができる。

つまり、古典の知識を欠きがちな現代青年たちにとって、中国の伝統

文化を理解するための有用な参考書として『幼學瓊林』は位置づけられているのである。その実際の効用としては、平岡龍城氏が『幼學瓊林』訳を日本で出版した折り（テキストは『精注雅俗故事讀本』大正六年、周達用注を使用）その序文のなかで、以下に述べる通りであろう。

余少時、本書を課せらるること日に二葉、熟読數過三閱月の後、容易に背誦するに至り、後年水滸、紅樓等の稗書を解するに其便を得しこと、実に少なからず、今、本書を世に公にする所以の一に実はこの点に在つて存ず、由来漢書に系統をなしたる索引なく、殊に故事の書は、韻書に非れば類語集にして、所要の語を検する、幾ど咄嗟の用を辨ぜず、今、本書が一方よりすれば、一種の文集にして記誦に便に、又他方よりすれば簡約なる百科詞類字典として此類の書中に於いては実に嶄焉として一旗幟を標する者と云ふべし。

平岡氏の序文は中国の伝統文化と縁の薄い日本人の立場から書かれたものであるが、解放以前の伝統文化に批判的な現代中国で育った一般青年たちにも、古典知識に関してはほぼ同じことが当てはまるものと思われる。

では、その『幼學瓊林』とは、一体如何なる書物なのであろうか。

この初探は、上篇に於いては『幼學瓊林』をめぐる諸問題を検討する。下篇では『幼學瓊林』第一篇「天文」を対象に取り上げ、本文とその代表的な注である鄒聖脈の注釈に考察を加え、かつ筆者が収集し得た鄒聖脈以外の注釈を併記して、その書の姿を具体的に示そうとしたものであ

る。なお、資料篇として筆者が収集し得た『幼學瓊林』の序跋の幾つかと、各種目録上で調べ得た蔵書の著録を付録する。

## 一 『幼學瓊林』の性格について

この書籍の概略に就いては、かつて、酒井忠夫氏が他の類書と共に触れたことがあるが（明代の日用類書と庶民教育）『近世中国教育史研究』一九五八所収・「元明時代の日明類書とその教育史的意義」『日本の教育史学』一九五八所収）、簡略なもので、ここでは伝統蒙学叢書につけられた諭岳衡氏の前言に沿って見る事にしたい。いま、まずそれを訳出し、諭岳衡氏の解説に補足説明すべき点があれば後に注として取り上げることにする。

### 諭岳衡『幼學瓊林』前言

古くから伝わる蒙学書には、広い地域に流行し、大きな影響を持った体裁がある。それは、対句式（通常押韻）で書かれた各種の知識読物で、特に歴史文化常識の読物である。

対句式の文章は、もし更に韻を踏み、一句あるいは数句で歴史上の人物や歴史上の物語を紹介すれば、児童が読み上げるのに口に滑らかで、味わい深く、字を覚えられるばかりでなく、更に知識も増やせ、生涯忘れられないようになる。これは古代の蒙学書の、内容と書き方

の上での革新であり、進歩であり、新しい発展であった。唐代の『園冊』は、今日既に原書はみられなくなっており、この性格を持っていたかどうかには就いては明確ではない。五代後晋李瀚（一説には唐代の李瀚）の『蒙求集注』は、おそらくこのような書籍で今に伝わる最も古もので、この後更に発展して明清以来広く流行した『幼學』となった。<sup>①</sup>

五、六十歳以上で、私塾で勉強した人は、ほとんどの人が『幼學瓊林』を読んだ事があるだろう。<sup>②</sup>この書籍は原名を『幼學須知』といい、また『成語考』、『故事尋源』等の異名がある。明代の程登吉（字は允升、西昌の人）の原著、ただし、明代の景泰年間の進士邱濬の編という説もある。その後に行通した本は清鄒聖脈が増補注釈した『幼學故事瓊林』である。辛亥革命（一九一一）以後に於いても、費有容の続増補本と葉浦孫の再増本がある。前者は、民国以後の各種の『新知識』を増補することに重点を置く。例えば、「名譽は、第二の生命であり、法律には三つの大きな自由がある。税を収め兵士となり、各々責任を尽くす。お辞儀には帽子を取り、常に礼儀正しく」などの類である。

後者が増補したのは主に旧来の人物故事であったが、その内容の精密さと、文采に就いていえば、共に程登吉・鄒聖脈の原書に劣る。よつて、程・鄒の原書に更に生彩を加えられるものではなかった。『幼學須知』（後世の刊本）の書などは通行本の程・鄒本と更にかき離れ、内容も多く、点で異なり、編目すら同じでない。例えば、程・鄒本の第一巻は天文、地輿、歳時、朝廷、文臣、武職、となつてゐるが、『幼學須知』では、第一巻が天文、地輿、時序、統系、朝廷、相猷となつてい

る。但し、やはり「西昌程允升先生作」と称していることは、伝えられてきた本に後人の改変があつたことを物語る。

各種のテキストが伝えられた過程に於いては、程・鄒本が最も良い。私たちが、今回重印したのは、程・鄒本を底本とし、新しい標点を加え、同時にそのほかのテキストを参照して校訂し、その中の誤字を改めた。つまり、明清以来世間に最も流行し、最も良いと認められたテキストを整理重印したのである。<sup>③</sup>

この書が過去全国に流行し、長い間廃れる事なく、どここの家の誰でも知っている蒙学読本となる事ができたのは、当然その独特の点にあった。人々はいつもこう言っている。「増廣」を読めば会話ができ、「幼學」を読めば本が読める」。この言葉には、しっかりと裏付けがある。昔、勉強はあまりしていないが、多くの成語や典故を、時には流暢に暗唱し、自由自在に用いる人をよく見かけたが、その秘訣は『幼學』の書に力を得ている事が多かったのである。この小冊がかように多大な神通力を持ったのは、それが主として内容に多種の「童蒙が求める」材料を手広く収めており、その及ぶ範囲が広がったからである。天文地理、古今往来、義理人情、家庭婚姻、生老病死、衣食住行、制作技術、及び鳥獣花木、神話伝説に至るまで、含まぬものはない。昔の人々が日常使う文字、よく見聞する成語や典故は、殆どこの書籍中に搜し当てる事が出来る。ある意味からすれば、それは読む事の出来る常用成語典故小辞典といつてもよい。この辞典が通常の辞典と違うところは、説明文が簡潔に練られており、また比較的妥当であること、言辭は多くはないながらも、成語典故をはつきりと説明する目的

を果たしている点である。例えば、

言無きを緘黙と曰い、怒を息るを霽威と曰う。(人事)

大いに笑うを絶倒と曰い、衆の笑うを哄堂と曰う。(人事)

彼此合わせざるを齟齬と曰い、進まんすすまと欲して前すすまざるを趨超と曰う。

(人事)

人の牽制を受くるを掣肘と曰い、羞愧を知らざるを厚顔と曰う。(身体)

等は、ただ二字から四字で、成語の意味をはつきりと説明している。時には字数が些か増えるが、それでも簡単な文を越えることはない。

例えば、

其の事を贊襄するを、之を玉成と謂い、分裂して完すまかり難きを、之

を瓦解と謂う。(人事)

管中豹を窺うは、見る所多からず、井に坐して天を觀るは、知識廣

からざるなり。(人事)

同惡相い助するを、之を桀を助けて虐を爲すと謂い、貪心厭う無き

を、之を隴を得て蜀を望むと謂う。(人事)

事に大利有るを、奇貨居る可しと曰い、事宜く前を鑒みるべきを、

覆車當に戒むるべしと曰う。(人事)

下の句で上の句を説明するときもある。例えば、

邊幅を修めざるは、人の儀容を飾らざるを謂い、崖岸に立たざるは、

人の天性和樂するを謂う。(人事)

蕞爾么么は、其の甚だ小なるを言ひ、鹵莽滅裂は其の精ならざるを

言う。(人事)

これらの文章を熟読することは、これらの成語の意味を記憶することでもある。辞典でありながら読むことができ、労少なくして効は多い、これは原著者の創造と言わざるを得ない。

内容に於いては、多くの神話伝説、歴史故事、人物故事までも収めている。例えば、

后羿が妻は月宮に奔りて嫦娥と爲り、傳説死して其の精神を箕尾に託す。(天文)

刎頸の交りは相如と廉頗、總角の好みは、孫策と周瑜。(朋友)

茫仲淹は胸中數万の甲兵を具え、楚の項羽は江東に八千の子弟有り。

(武職)

符堅は自ら誇りて將に廣めんとして鞭を投げて以つて流を斷つべしとし、毛遂は自ら薦めて才奇とし囊に處れば便ち當に穎を脱すべしとす。(武職)

またさらに、多くの格言をも収め、典故と格言の二者をうまく組み合わせているところもある。例えば、

智は圓あまねからんことを欲し、行は方あたしからんことを欲す。(人事)

當に器満つれば則ち傾くことを知るべく、須く物極れば必ず反ることを知るべし。(人事)

善を爲せば則ち芳を百世に流し、惡を爲せば則ち臭を萬年に遺す。

(人事)

兼聽なれば則ち明にして偏聽なれば則ち暗しというは、此れ魏徴の太宗に對こたうるもの、衆怒は犯し難く専ら欲するは成し難しというは、此れ子産の子孔を諷するものなり。(人事)

このような格言は、千年来人々に唱え伝えられてきたものであり、今日でもなお積極的な意義を持っている。

以上は、本書の内容に就いて述べたものである。「幼學」がこのように喜ばれて受け入れられてきた理由は、それが四言、五言或は七言の制約を破り、長いものは長く、短いものは短く、ただ対句形式を求めただけで、無理に押韻を整えようとしていない所にもある。同時に、内容に応じて分類配列し、檢索に都合の良いことは、類書の性格を持った工具書と言つても良いだろう。

「幼學」は明代にできたものであるから、当時の階級意識の反映を免れることはできない。書籍中封建思想意識を宣伝するものも少なくない。例えば、「龍の種、麟の角は俱に宗藩を譽め、君の儲、國の貳は皆な太子を稱す。(朝廷)」等の類は至るところにある。更に平凡でつまらないものや、迷信やでたらめのものもある。しかし、これらもまた古書籍に来源があるものであり、勝手に作り出したものではない。読者が広く目を通すならば、やはり、古代の文化と社会を理解する役割を果たすことができるであろう。我々は、その精華を取り、糟を捨てる読者の識別力を信頼したい。

注及び補説

① 「兎園冊」は、唐・杜嗣先の撰。問いに答える形式で、經史の文を注釈として引いていたという。五代のころ、民間で農民たちを教えるテキストとしてずいぶんはやつたらしく日本にも將來された形跡は『日

本国見在書目』に有るが、今では敦煌文書に残巻をつたえるのみである。「蒙求」は人物故事を覚え易くまとめたもの。日本でもつとに知られて多くの読者があり、和刻本もある。

②『論学集林』（一九八七・一二月上海教育出版社 兎園策条）に歴史家呂思勉氏（一八八四—一九五七）が幼い頃村塾で見たとある。そのとき、なんのために朗詠するのかと尋ねたところ、昔からこうやってきたからこうするまでで、他に言うべきこともないと答えられているから、清朝末期当時一般化が過ぎてかなり惰性的な蒙蒙教育テキストとなってしまうようである。また、一九七一年に台湾で刊行され、八六年に天津古籍出版社から再版された方師鐸『伝統文学与類書之關係』では、『幼學瓊林』について項を立て、かつて蒙蒙の「四書五経」教育の副読本として使われていたが、今では用いる人もなく、台湾では殆ど手に入らなくなっていることをいう。

③『幼學瓊林』の名前のうち「瓊林」の部分は、鄒聖脈の命名による（資料篇一鄒聖脈序文参照）。この書は、指摘されるとおり多くの名を持つ（資料篇二参照）。筆者の収集し得たテキストの内最も古い明刊版は、『幼學須知便讀故事』となっている。

作者に就いては実はよく解らない。程登吉の時代も人によっては清朝といひ、図書目録にも清・程允升とするところもある。東大東洋文化研究所の漢籍目録では明・金閻楊瑞卿の刊として、明代の刊本となっている。加えて、明の葉盛（一四二〇—一四七四）の『葦竹堂書目』には類書の項に『幼學須知』とあるから、この記載を信じる限りやはり明代とすべきであろう。筆者の見たところ邱濬の作とするものは『成

語考』と呼ばれるテキストが主で、日本江戸時代中期に刊行された和刻本（天和壬戌一六八二年の跋）はこの系統である。邱（丘）濬であれば明永樂十六年（弘治八年（一四一八—一四九五）に生きた広東瓊山の人。朱子学者として知られている。彼には『故事雕龍』（日本天和辛酉一六八一の序）という同様の著作が他にあり、『幼學瓊林』同様日本のいくつかの図書館で見ることが出来る。

『幼學須知』に就いては、筆者の見たものの中では長崎大学に伝えられる『育正堂幼學須知句解』が指摘されるとおりになっている。民国以後の指摘された版本については未見。復旦大学出版本に、鄒聖脈増加以後に、近代的な知識を伝える再増が掲載されているので、下篇に資料として一部載せておく。

『幼學瓊林』のテキストには筆者の見たところ本文単独で刊行されたものも有るけれども、注釈が附けられているものも多い。明刊本は本文の上に注者不明の簡略な解釈を付し本文の脇にも更に簡単な解釈出典を付す。清の刊本になると『育正堂幼學須知句解』（乾隆丁丑一七五七序文）に割注で「錫山黃君の箋」として出典解釈が附けられ、「寄傲山房新增幼學故事瓊林」（乾隆二五年一七六〇序文・『草場本』に依る）則ち鄒聖脈の増加本には、彼の注解が割注に入れられ、『亦陶書室新增幼學故事羣芳』（乾隆四三年一七七八序文）には周達用の注解が同様に割注で入れられている。

一方、日本ではどうだったかと言うと、先に挙げた和刻本はその本文や注文の形態を比較すると東大東洋文化研究所蔵の明刊本の翻刻と言って良いくらいであるが、明刊本の題名が『幼學須知便讀故事』西

昌程登吉撰であるのに対して、和刻本は『新鵠詳解丘瓊山必讀故事成語考』となり注釈者も盧元昌と明記している。和刻本には丘瓊山の序文も盧元昌の前言もない。しかし、和刻本に附された序跋では、共に丘瓊山のものとして見做しており、また大英博物館に残る一八世紀中期刊の『幼學故事尋源』は、作者を邱濬としているから或は依り所があるのかも知れない。この後、京都の商人三宅元信がこれに注を附け『明丘瓊山故事必讀成語考集註』（寛政元年一七九一序）を刊行している。以上様々な注釈本が出回っている内、日本でしか見られない三宅註本はひとまず置くと、やはり鄒聖脈のものが最も詳しく当を得たものと見るのは妥当なところで、近年中国で出版された三種の『幼學瓊林』はすべて鄒聖脈の注である。

なお、注釈者である周達用や鄒聖脈等の伝記或は事績に就いては、筆者は今の所まったく手がかりを得ていない。

④ 鄒聖脈の『幼學瓊林』の目録を以下に示す。（尚、版本によつては各篇次に移動がある。）

- 卷一 天文 地輿 歳時 朝廷 文臣 武職
  - 卷二 祖孫父子 兄弟 夫婦 叔侄 師生 朋友賓主 婚姻 婦女
  - 外戚 老幼寿誕 身体 衣服
  - 卷三 人事 飲食 宮室 器用 珍宝 貧富 疾病死葬
  - 卷四 文事 科第 制作 技芸 訟獄 釈道鬼神 鳥獸 花木
- この他に刊本の幾つかには本文の前に社会生活の基本知識集といったものをのせ、また、書籍によつては本文の上段を区切り、本文とは別に様々なケースの手紙の書き方の例文や百家姓等を挙げているもの

もある。今例として、鄒聖脈のテキストの一つ『最新繪圖幼學故事瓊林』（宣統元年序文一九〇九）の目録を取れば

卷首 天文図 地輿図 帝服図

卷一（上層） 十三経集字（右から左に一列に経書の楷書文字を並べ

その下に籀文を附けたもの。初めの部分は『禮記』大学に基づく）

（中層） 各信啓（下層） 本文

卷二（上層） 十三経集字（中層） 各信啓各称呼

卷三（上層） 十三経集字 百家姓（中層） 各称呼 天干名義 地

支名義 月令別名 十二律所属 契約字據 直省別名 文武品級

皇朝一統輿地志 歴代帝王紀

卷四（上層） 歴代帝王紀 各式禮帖 喪務帖式 各請帖式 書信規

格 信面各式 对聯新譜

これを見ると、当時の初学者にとつての一大入門書と言えるばかりでなく、家庭に置いて何かの折りの実用書としての価値は十分持ったものと思われる。

なおこの実用書的な傾向は現在の『幼學瓊林』にもあり、先掲の近年中国で刊行された三種の『幼學瓊林』のうち、他の二冊は本文のみであるけれども、復旦大学出版社刊の『幼學瓊林』では本文前に伝統的な各種人呼称の例が様々載せられている。

以上、喻岳衡氏の紹介を見てみたが、次の三点を補足しておく。

まず、この書は、方師鐸の『伝統文学与類書之関係』が指摘するように、所詮童蒙の俗書として、これまでではけつして高い評価を受けてきた



ものではなかったこと。その内容が、多くの書籍からの知識の集積であることや、対句構成とはいえ対句の作り方が大ざっぱなどの点などからして、正当な読書法や教育を受けたものには、所詮童蒙の啓蒙書と見るであろう事は当然である。それが、現代にこのように注目されているのは、時代・社会・文化の担い手が変わってしまい、かつての文化知識を知る上での簡便さが受けたものと言えよう。

次に、天・地から始まり、朝廷・君臣に導き、祖先から家族友人と受け、人事物品に入り、最後に草木で終わる『幼學瓊林』の分類と次第は、ほぼ伝統的な類書の分類・次第に依るといつてよい。これは、一見つまらない指摘に思えるであろう。しかし、分類と配列には常に価値規範が示されるのが中国の書籍の常であるし、特に類書のように事象の網羅をを目指すものにはその事象の分類・配列に世界観が示されるといつてよい。だとすれば、童蒙用であるからといって、『幼學瓊林』には童蒙教育用の価値規範があるのではなく、あくまで伝統類書の簡略版の立場に立つ事を示すものである。それは即ち、幼時より直接伝統的な世界観へと導くものといえるのではないか。『幼學瓊林』が、近年中国で多量に出版された事に我々が注目したその理由は、実はこの点にもあったのである。

第三に、この書の実際の使い方としては、喩氏が指摘する成語辞書としては勿論の事、清朝においては科挙に課せられた詩文作成の典故集的な役割も担ったようだ。清・鄒聖脈の序文には、その旨が記されているし、また、日本においても、和刻本の序文には作文の折りに重宝するものと記されているのである。(資料篇一参照)

## 二 『幼學瓊林』の検討に就いて

以上のような『幼學瓊林』を考察の対象にするに当たっては、当然それなりの意味がある。まず、中国で『幼學瓊林』を含む伝統蒙学叢書が刊行されたとき、そこに如何なる意義が認められたのか、その総序とも言える周谷城氏の序文を見てみよう。周谷城氏は現代中国を代表し、伝統教育に関心を持つ社会学者である。なお( )は、訳注。

岳麓書社が整理して出版しようと計画している『伝統蒙学叢書』について、私は深く賛意を表する。というのは、それは文化史の研究に大いに役立つ事だからだ。

蒙学の書物は、長い歴史を持つ。李斯『蒼頡篇』、史游『急就章』は、当時最高の知識人の手に成るもので、初学者の啓蒙に使う書籍でもあり、きつと当時最多の読者を持ったに違いない。『漢書』藝文志には小学十家が収められている。所謂小学とは、つまり蒙学の事である。

その後、社会は絶えず発展進歩し、貴族以外の平民も読書の必要と可能性を持つに至った。教学法と教材はこの状況に対応し、事実上の「双軌制」(二系統の教育を平行して置く制度)が現れた。士農工商四民の内、『漢書』食貨志では「学びて以て位に居るを士と曰う」とある。位に居るとは、つまり官吏になることである。官吏になるためには、経籍に通じ、科挙に応じねばならない。儒家の経籍は、そこで、士大夫階級の法定教科書になった。しかし、農工商等の庶民の天職は、「土

を辟き谷に殖し、「巧を作し器を成し」、「財を通じ貨を鬻す」ものであつて、もし、多くの文字を知らず、大体の文字に通じようとなれば、別に簡便な方法を求めざるを得ないのだ。『新五代史』劉岳伝に言う。

『兔園冊』は、郷校の田舎儒学者や農民や家畜飼いが朗唱するものである。(名門の劉岳が、農家出身であつた当時の宰相馮道をからかつて、馮道愛読の『兔園冊』を持ち出した部分)

陸游の「秋日郊居」詩第三首の自注に言う。

農民は十月になると子弟を学校に入れる。これを冬学という。そこで勉強する『雜字』、『百家姓』の類は、村書という。

このような、農民や家畜飼いが朗唱する村書こそ、唐宋以後の蒙学書である。

我々が文化史を研究するとき、全民族と各階層の人民文化の進展に着目し、過去の各時代各地の社会に於いて多くを占めた人々の文化に着目する必要がある。よつて、唐五代の文化を研究するには、『北堂書鈔』(唐虞世南編)、『監本九經』(五代馮道主宰)の他に、いま残る『兔園冊』の残篇を研究してみるのもよい。宋代文化を研究するには、『困学紀聞』(王忠麟撰)、『劍南詩稿』(陸游撰)の他に、『三字經』と『百家姓』を研究してみるのもよい。『兔園冊』は必ずしも虞世南が編集し

た書物ではなく、『三字經』も必ずしも王忠麟が作成した書物ではない。しかも、『三字經』はただ農家や牧畜家ばかり読んだ物とは限らないのだ。しかし、当時の一般の人が受けた教育、及び教育によつて形成された彼らの自然観、宗教観、倫理観、道德観、価値観、歴史観等は、文人学士が書いた書籍と比べれば、これらの書籍の中に、より確かで鮮明に反映されている。何故、長菜老(馮道)と陸放翁の様な人がこのような通俗小冊に対して、無視しようとはしなかつたのであろうか、と考へてみるべきである。

当然のことながら、封建時代に生まれ伝わつて行つた蒙学書は、同様に封建文化の範囲にあり、その局限性と後進性は自然免れられない。しかし、たとえそうであっても、それらは、決して廟堂の文、大雅の作がより一層の局限性と後進性を持つほどではない。蒙学書のあるものは長い間流行し、社会に長期に渡つて享受された。基本知識を伝授し、道德教育を進め、口の上せ易く記憶し易いなどの点で、確かに長所と有効性を持つている。簡単に片付けてしまふわけにもいかないし、そうするべきでもない。単にこの点をもつてさえ、これらの書籍自身、文化史と教育史上の価値を持つべきである。

周谷城氏の序文では、『幼學瓊林』を含む伝統蒙学書検討は中国の文化史や教育史研究に大きな意義があるという。確かに指摘される通りである。実は中国文学研究に携わる我々がこの種の書に興味を持ったのは、第一にその文化的な面からであつた。

我々が日頃研究と称して触れる書籍の多くは、それが小説であれ詩文

であれ一般には所謂文学作品として認められたものであるので、当時の知識水準のかなり高い人物によって書かれたものと言って良い。けれどもそれを楽しんで読んだ人々の知識水準も作者同様高かったかといえ、必ずしもそうは言えない。とはいえ、明清文学を考える場合は、読者或は通俗文学の作者の知識水準としてこの『幼學瓊林』程度のもは、予想して良いであろう。先にも述べたように、資料一に挙げた『幼學瓊林』版本の序文集に於いて鄒聖脈は、該書が科挙の詩作成に役立つことを言う。これは、多分に売るための宣伝文句の性格を持つものと考えられるが、その書の対象者が小児ばかりでなく、科挙の受験を目指す知識人或いはその予備軍にも向けられていた事を物語るものである。だとすれば、この『幼學瓊林』の検討は明清文学の背景や影響を知る上で何等かの役に立つのではあるまいか。

次に、この『幼學瓊林』には江戸時代中期初め『成語考』の名で和刻本があり、それがかなり出回った形跡があることにも注目したい(資料二著録参照)。というのは、江戸時代の通俗小説の中には漢籍に典故を持つ結構口調の良い語句がまま登場するが、そのような語句の典故には、原典の漢籍そのものより引かれたと考えるより、当時流行していた通俗類書より引かれたものが多かったであろう事は、想像に難くない。その場合、『幼學瓊林』のようにかなり民間に出回った形跡のある漢文書籍がその典故の提供所となっていたことは、十分考えられることではあるまいか(例えば、単なる類似であろうが『世間娘氣質』巻一、第三話に「六月に冬の調子を吹きて霜を降らし」。『幼學瓊林』天文に「鄒衍下獄、六月飛霜」とある)。尚、このことについては、『俚諺大成』(日本書誌学大

系五九 加藤定彦、外村展示編、青裳堂書店一九八九年一月)に、参考文献の一種として用いられているので、その点からの注目はなされているといつてよい。但し、その俚諺の主要文献は和書が中心である。また、それとは別に、和歌山藩儒の荒川秀や三宅元信の序文(資料一参照)から窺えるように、この『幼學瓊林』が江戸時代の漢籍を学ぶ者にとって漢籍学習の入門書となっていたことが考えられる。だとすれば、漢籍の原典に広く目を通して時代の頂点に立った漢学者はさておき、一般民間知識人の漢語知識の内容にはこの『幼學瓊林』をもって大体の水準が設定できるのではあるまいか。つまり、『幼學瓊林』の検討は中国の文化史のみに留まらず、漢字文化圏の一部であった日本の文化史や文学史考察の上にも何等かの問題の設定が可能だと思われるのである。この点に就いては、国文学の分野であるいは既に専論の業績があるかも知れないが、筆者は寡聞にして知らない。ちなみに、この『幼學瓊林』は、その原著である『幼學故事尋源』等が英国に伝えられており、『成語考』は一九世紀末に英訳が出ているので、英国での中国文化理解にも何等かの役割が果たされたと思われる。(資料篇二大英博物館所蔵漢籍目録参照)

第三に、中国に於ける童蒙教育の問題への関心が文学研究に携わる我々に有ったことを挙げて置かねばならない。これは教育史研究的な仕事を日頃文学研究に携わる人間が試みた大きな理由だといつて良いかも知れない。

それに就いて、蛇足ながらここに少し述べておきたい。現代では個人を基礎として社会が考えられるようになってきているけれども、少し以前に遡れば、社会の方が個人よりも圧倒的に強い場合が一般的であった。特

に中国のように皇帝制度の確固としていた伝統社会に於いてはそうではなかったか。しかし、それでも個人の中に生まれる感情はおそらく現在我々が感じるものときほど違いはなかったと思われる。そこで、もし、優れた社会性や人間性を示す文学は、生身の個人と秩序伝統を維持して行こうとする社会との攻めぎあいの中で生まれるものだと言うことが許されるとすれば、文学研究に於いて、作者の立場に立つて考察を試みるだけでは不十分で、その作者が生きた時代の共通認識つまり社会側の論理の検討も十分に為されねばならない筈である。では、その社会側の論理を知るにはどうすれば良いか。もちろん、その考察方法は数多くあるだろうが、我々はその効果的な方法としてその時代の童蒙教育の検討が挙げられるのではないかと考える。そもそも教育と言うものは、その社会の達成した文化知識の基礎を、やがてその社会の成員となるべき童蒙に確かに伝え、その社会を維持発展させて行こうとするものである。しかも「三子の魂百まで」の諺も有るように、童蒙教育はその人のその後の実生活や思想をかなり強く規定して行くものと思われる。もしこのように考えることが正しいとすれば、童蒙教育の考察はその時代の人々の生活知識や社会認識の共通の基礎を教えてくださいものといつてよいのではあるまいか。

ただし、明清期に於けるそれを知るためには、啓蒙知識や成語を分類し、図書目録では類書に入れられた『幼學瓊林』が最適であるというつもりはまったくくない。それには、もつと良い書籍、例えば個別の家訓や皇帝の教訓等のほうが適当であろう。このような研究に初めて取り掛かる若輩の我々素人としては、とりあえず資料が集め易く、現代中国でもい

まだに需要があり、かつ日本に於いても江戸時代に漢籍の入門書として多く読まれた筈の『幼學瓊林』が、童蒙教育研究の手始めとしては手ごろなものと思われたのである。

このような試みが、果して価値を持つものであるかどうか、ここに記して、諸先生方の御批判をお願いする次第である。

一九八九 九 三〇

(付記) 筆者の一人、甲斐は、以前福岡大学人文学部在任された佐々木猛先生に『太公家教』を読んでいただき、中国の童蒙教育に関心を持った。ここに記し謝意を表す。